

「囚人のジレンマ」を使った小学生に対する実験的研究 ～ 子どもの意思決定に他者の存在はいかに関わるか？ ～

富山研究室 00601105 井上 直子

1. はじめに

現代社会の中に生きるわれわれは、多くの情報が行き交う中でさまざまなことを考慮し意思決定している。その中でわれわれ「大人」と呼ばれる人間が意思決定をする際に、少なからず「他者の存在」を考慮していることはいうまでもない。そして、「他者の存在」がわれわれの意思決定に大きな影響を及ぼしているといっても過言ではないであろう。つまり、「他者の存在」を意識したがために自分が望んでいる意思とは異なる決定をすることもあり得るということである。では、われわれ「大人」が「他者の存在」を意識して意思決定を行っているのに対して、「子ども」はどのようなことを考慮して意思決定をしているのだろうか。「大人」が「他者の存在」を意識しているということは、(山岸、1998)ですでに検証されている。その中では、「大人」は「相手が協力行動をとるのであれば自分も協力行動をとるし、相手が非協力行動をとるのであれば自分も非協力行動をとる」という人が多かった。しかし、被験者が「子ども」となると実験を行った検証はなかなか困難であると考えられるため、実験はなされていなかった。「子ども」にも意思はあり、日々の生活の中で小さなことから大きなことまで、さまざまな意思決定を行っている。「子ども」たちがどんなことを考慮しながら意思決定をしているのか検証する必要があるのではないだろうか。この問を解決するため本研究は、「子どもの意思決定に他者の存在はいかに関わるか」ということを実験的に明らかにすることを目的とした。

2. 実験の内容

心理ゲーム1-1

この心理ゲーム1-1は、全てのクラスの児童に行ってもらった。はじめにアンケート用紙と数字の書かれたカードを配り、番号の書かれたカードに書いてある数字が自分の番号であることを説明する。さらに同じ学年のもう一つのクラスで同じ心理ゲームを行うことを説明し、同じ番号の書かれたカードを持っている人が、自分の心理ゲームの相手であることを説明する。次に、心理ゲームを行ったときの結果である4通りについて説明する。ここで、相手から500円を「もらえた人」は、サンタクロースからさらに500円をもらえることを説明して、結果として起こる4通りの場合に相手と自分がるか「くれない」かということとはわからない状態で、いくらずつもらえるかを説明する。そして、相手が「くれない」か「あげない」か「あげる」か「あげない」かを尋ねる。

心理ゲーム1-2

心理ゲーム1-2では、起こりうる結果の4通りを心理ゲーム1-2①から心理ゲーム①-2④と設定し、それぞれの場合に対して被験者がどのくらい満足するかを尋ねる。「たいへん満足である」人はア、「満足である」人はイ、「どちらでもない」人はウ、「不満である」人はエ、「たいへん不満である」人はオのどれか1つだけに○印をつけてもらった。

心理ゲーム2-1

（「相手がくれるクラス」の場合）

この心理ゲーム2-1は、BクラスとDクラスの人だけに行ってもらった心理ゲームである。Bクラスの人に対してはAクラスの人が、Dクラスの人に対してはCクラスの人が「500円をくれると言っている」ということを情報として与える。この情報を与えられたとき、BクラスとDクラスの人が自分の500円を相手に「あげる」か「あげない」かということを探る。

（「相手がくれないクラス」の場合）

この心理ゲーム2-1は、AクラスとCクラスの人だけに行ってもらった心理ゲームである。Aクラスの人に対してはBクラスの人が、Cクラスの人に対してはDクラスの人が「500円をくれないと言っている」ということを情報として与える。この情報を与えられたとき、AクラスとCクラスの人が自分の500円を相手に「あげる」か「あげない」かということを探る。

心理ゲーム2-2

心理ゲーム2-2では、心理ゲーム2-1で「あげる」と回答した人は「あげる」と回答した理由を、「あげない」と回答した人は「あげない」と回答した理由を尋ねる。

3. 結果と分析

心理ゲーム1-1

(1) 6年生になるとクラスによって「あげる人」が多いクラスと、「あげない人」が多いクラスとに分かれる。このことから、この時期の子どもたちは、考え方の分岐点にあるといえるであろう。

表1 心理ゲーム1-1

クラス	あげる	あげない
A	50%	50%
B	50%	50%
5年生の割合	50%	50%

(2) 6年生で「あげる人」が多かったクラスと「あげない人」が多かったクラスに分かれるが、これはクラス風潮が出ているといえるだろう。

(3) 5年生では、どちらのクラスも「あげる人」「あげない人」が半数ずつになっている。5年生と6年生を比べて見ると差が出ている。これは、5年生と6年生という年の差ではないだろうか。子どもの頃の1年というのは、とても大きな成長の差があると考えられる。つまり、5年生と6年生でも成長の差がでていないのではないだろうか。

心理ゲーム1-2 ①

(1) アとイの層が全体で半数を超えているということは、500円をお互いに交換し合うことに対して、いいことだと考える人が多いと考えられる。

(2) (1)より自分だけが得をするのではなく、自分と相手が平等であることをいいことであると考えているのではないかと考えられる。

C	60%	40%
D	34%	66%
6年生の割合	47%	53%
総割合	49%	51%

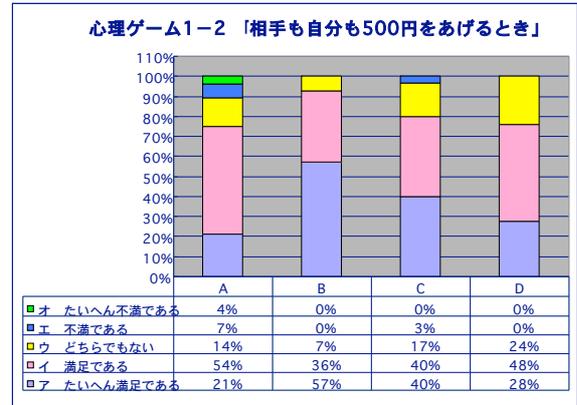


図1 心理ゲーム1-2 ①

心理ゲーム1-2 ②

(1) どのクラスもアもしくはイを選択している人が多い。アもしくはイの選択肢を一番多いクラスで23人、また、エもしくはオの選択肢を一番多く選択している人は8人いる。自分だけが得をするに対して、抵抗やもしくは罪悪感を感じている人もいるといえる。

(2) ウを選択している人が、心理ゲーム1-2①よりどのクラスも増えていることから、自分だけが得したことに対して、良いことだと思っていないのか、悪いことなのか迷っている人が多いことがわかる。実際は喜ぶたいが、相手に嫌な思いさせたのではないかと考えると喜べないという事実の中で、葛藤しているのではないかと考えられる。

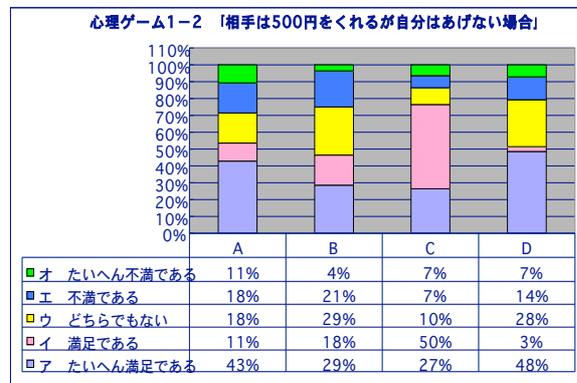


図2 心理ゲーム1-2 ②

心理ゲーム1-2 ③

(1) 心理ゲーム1-2②と対照的なデータが出ると考えられるが、心理ゲーム1-2②ではアが最も多かったため対照的なデータになるには、最も多くオが選択されていなくてはならない。しかし、心理ゲーム1-2③では、Dのみが②のウがデータと対照的になっているだけで、他のクラスでは最も多く選択されている。全体でも、エが一番多く選択されている。このことから人を非難する場合は、やや控えめになっているといえる。つまり、他者を気にしているからこそ他者非難は控えめとなっているのであろう。

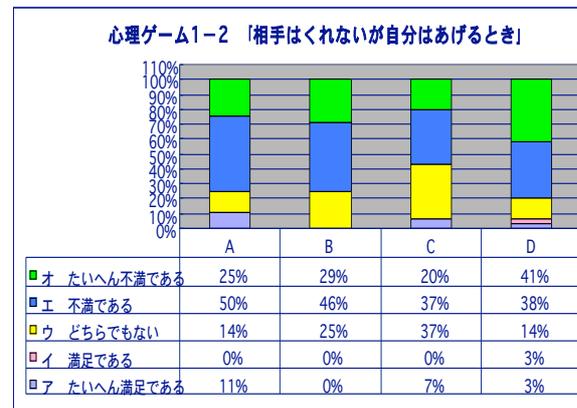


図3 心理ゲーム1-2 ③

心理ゲーム1-2 ④

(1) 心理ゲーム1-2①と比べると、心理ゲーム1-2④でアもしくはイを選択している人は、総割合で見ると93人となっている。これに対して、心理ゲーム1-2④でアもしくはイを選択している人は、34人となっている。このことから、相手も自分も同じ金額になる場合に、お互いが500円を交換し合うことに対して、好感をもっていることがわかる。

(2) 心理ゲーム1-2④では、心理ゲーム1-2①、②、③よりも、はるかにウの層が多いことから、はじめと金額が変化しないことに対して関心が、少ないということが考えられる。

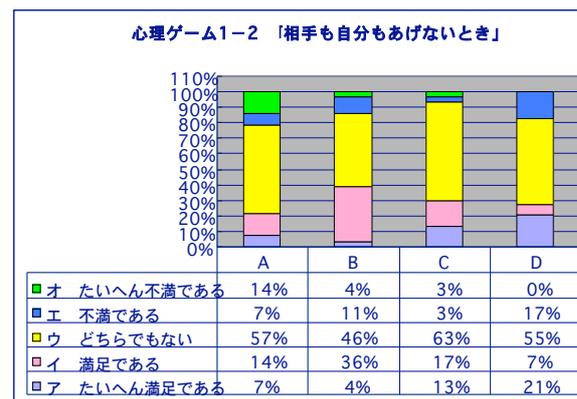


図4 心理ゲーム1-2 ④

心理ゲーム2-1

- (1) 大人と同じように相手がくれるなら自分もあげると考える子どもが多いと考えられる。
- (2) 6年生で、「あげる人」と「あげない人」の差があまりないということは、6年生が多くのことを経験をしたくさんの知識などを得て、考え方に個性が出てきている時期のため、「あげる人」と「あげない人」の差があまり出ないと考えられる。
- (3) Bでは、担任の先生が「最近お友達のことを考えられる子供が増えてきた」と言う言葉どおりである。

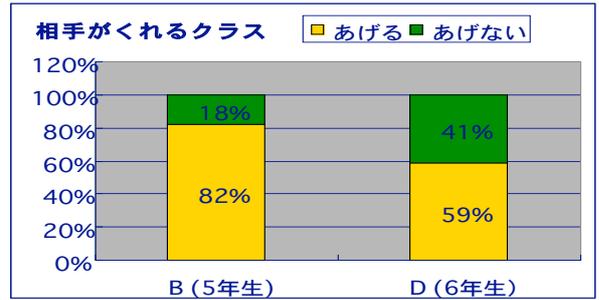


図5 心理ゲーム2-1「相手してくれるクラス」

心理ゲーム2-1

- (1) 大人は、「相手がくれないときに自分はあげる」と答えた人は10%程度に対して、子どもは12人で21%であった。これは、子どもたちが、相手の存在を意識するときに大人とは異なった意識の仕方をしてしているからだと考えられる。
- (2) 5年生のほうが6年生に比べて、相手のことよりも自分のことを優先して意思決定している人が多いと考えられる。

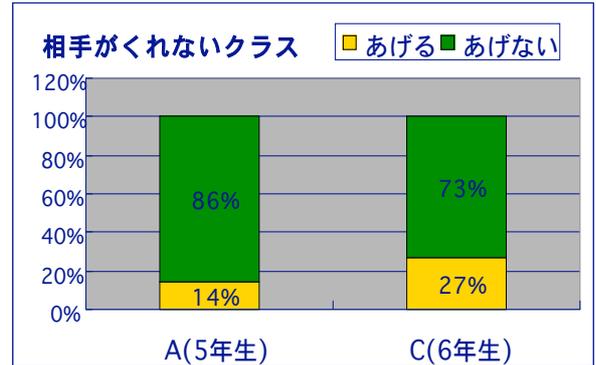


図6 心理ゲーム2-1「相手してくれないクラス」

心理ゲーム2-1のまとめ分析

- (1) 子どもで「相手がくれても、自分はあげない人」が17人で30%、「相手はくれないが、自分はあげる人」は12人で21%。(山岸 1998)によれば、大人で「相手がくれても、自分はあげない人」が25%、「相手はくれないが、自分はあげる人」が10%程度である。
- (2) 大人の場合「相手がくれるので、自分もあげる」と答えた人は75%、逆に「相手してくれないので、自分もあげない」と答えた人は90%に及ぶ。子どもでは「相手がくれるので、自分もあげる」と答えた人は40人で70%、「相手してくれないので、自分もあげない」と答えた人は46人で79%であった。「相手がくれるので、自分もあげる」と答えた人の割合は、「相手してくれないので、自分もあげない」と答えた人に比べて、大人と子どもの差が少ない。このことから、「くれる・あげる」にたしての感じ方は、大人と子どもでは大きな差がないが、「くれない・あげない」に対しての感じ方が大人と子どもでは違いがあるのではないだろうか。

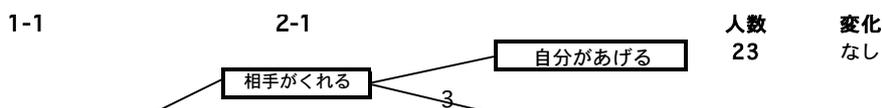
心理ゲーム2-2「相手してくれるクラス」

- (1) 自分だけを考えて意思決定をしていた項目とその他の項目の比較をする。すると、5年生では6人、6年生は4人が「自分のことだけ」を考慮して決定しているということがわかる。5年生は22人、6年生は25人の人が「他者を意識した」決定をしていることがわかる。このことから、子ども達も大人と同様に自分のことだけを考慮して意思決定している人が多いと言えるだろう。
- (2) 総割合で見ると、全体の割合は「あげる人」が40人で「あげない人」が17人しかいないのに、「あげない人」の選択肢の「ウ」は、全体の11人を占めている。総割合では、2番目に多い割合である。「あげる人」の選択肢も「オ」が一番多い。この結果からは、全体の割合としては、相手に依存はするが自分の得を考えている。つまり、相手の存在をある意味で意識しているが、大人が考える「相手してくれたのだから自分もあげよう」という意識の仕方とは別の意識の仕方である。ライバル視に近い意識の仕方ではないだろうか。

心理ゲーム2-2「相手してくれないクラス」

- (1) 「自分のことだけ」を考慮して決定している人は、5年生では6人、6年生では4人で差は2人しかない。ほとんど差が無い。しかし、「自分だけのこと」を考慮して決定しているよりも、「他者の存在を意識」して決定している人のほうがはるかに多い。つまり、「心理ゲーム2-2で相手してくれるクラス」同様に、子ども達は、「相手が自分にくれない」ことが分かっても、「相手の存在」を意識した決定をすると言える。
- (2) この意思決定の結果でも、6年生より5年生のほうが「他者の存在」を意識している人が少ない。
- (3) 「自分だけのことを考えた決定をした人が、「心理ゲーム2-2 相手してくれるクラスの理由」のところで「自分だけのことを考えて決定した人よりも、5年生では22人、6年生では25人となっている。このことから、子ども達が決定する際に与えた情報を意識した子どもが「心理ゲーム2-2 相手してくれるクラスの理由」の時よりも多いと考えられる。

応用分析1



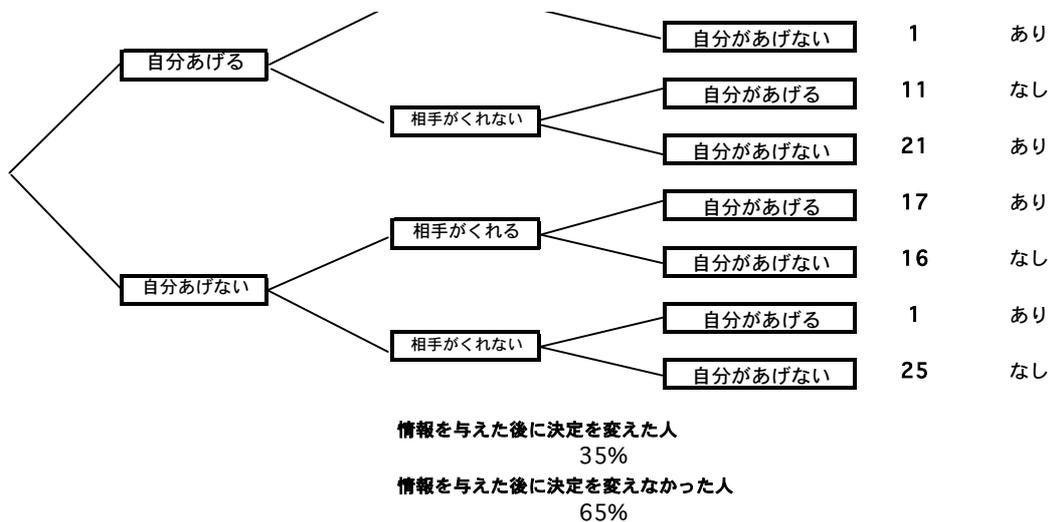


図7 心理ゲーム1-1と心理ゲーム2-1のクロス集計

- (1) 「情報を与えられた後に決定を変えた人」は「情報を与えられて決定を変えなかった人」に比べて30%少ないことが分かる。このことから、情報を基に決定をする子どもよりも、情報よりも自分の感情を優先する子どもが多いと考えられる。
- (2) 2-1で相手が「くれる」場合、1-1で「あげる」と答えた人のほうが「あげない」と答えた人よりも、2-1で相手に「あげる」と答えた人が多い。このことから、1-1で「あげない」と答えた子どもに比べて、1-1で「あげる」と答えた子どもの方が、相手のことを考えて決定している人が多いといえる。「他者を意識した決定」をしている子どもが多いということである。
- (3) 相手が「くれない」クラスの場合、2-1で「あげない」と答えた子どもが多かった。自分が損をすることに対して、抵抗があると考えられる。

応用分析2

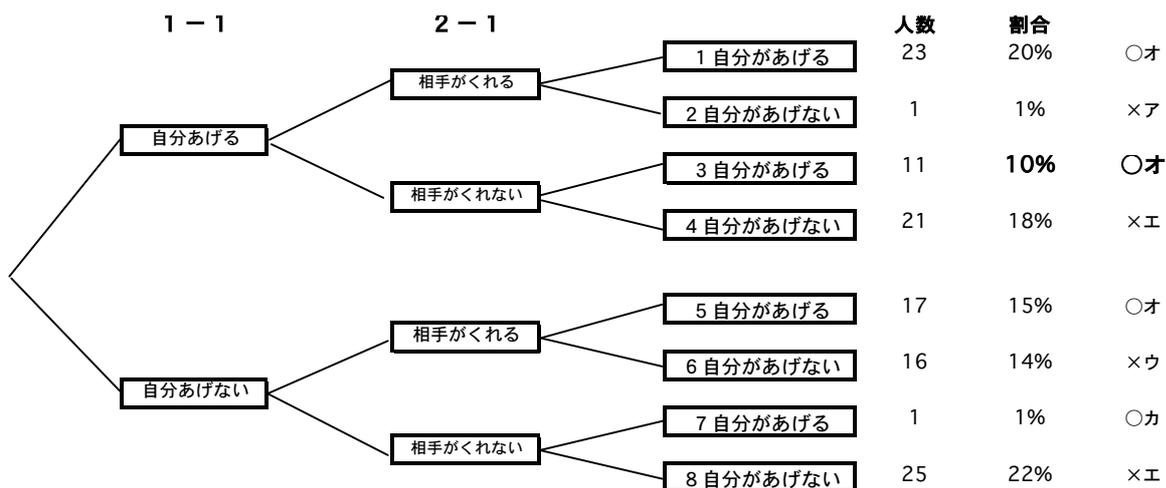


図8 応用分析1と心理ゲーム2-2のクロス集計

- ◎ 上述した8通りにはどんな子どもが多く集まっているといえるか
- 1自分 あげる」の場合**
- 相手に「あげる」ということを好む傾向が強いが、「平等」であることを好む傾向にある子どもが多いと考えられる
- 2自分 あげない」の場合**
- 相手によって「あげる」か「あげない」かを判断する傾向の強い子どもであると考えられる
- 3自分 あげる」の場合**
- 自分の損得よりも、相手に「あげる」ということをいいことだと考えている子どもが多いと考えられる
- 4自分 あげない」の場合**

・「あげる」を好む傾向にあるが、相手の出方によって決定は異なり、そのことよりも相手との「平等」を好む子どもが多いと考えられる

「5自分 あげる」の場合

・「あげる」「あげない」と言うことよりも、相手との「平等」を好む傾向にある子どもが多いと考えられる

「6自分 あげない」の場合

・他者のことよりも自分の損得を好む傾向にある子どもが多いと考えられる

「7自分 あげる」の場合

・他者のことを一番に考える子どもであると考えられる

「8自分 あげない」の場合

・「あげる」ということに抵抗感を感じているが、相手との「平等」を好む傾向にある子どもが多いと考えられる

(1)「自分だけ」のことを考えて決定をしている人は、全体の10%であることが分かる。人数で言うと115人中11人となる。逆にいえば、90%の人が「他者のこと」を考えて決定している人がほとんどであると言える。つまり、5・6年生の子ども達も自分のことばかりではなく、他者のことを考えらるようになってきているといえる。

(2)さまざまな考え方の子どもが多いのは当たり前のことだ。しかし、この時期の子ども達は他者と「平等でありたい」と考える子どもが多い傾向にあるといえる。「自分だけが得をしてもよくないし、相手だけが得をすることもよくない」と考えている。このことから、多くの大人が考える「相手がくれれば自分もあげるし、相手がくれなければ自分もあげない」という考え方に近いといえる。大人の「相手がくれれば自分もあげるし、相手がくれなければ自分もあげない」という考え方も、ある意味で相手との「平等」を好んでいるといえるからである。

応用分析3-1

心理ゲーム1-2における大人の実験結果

心理ゲーム1-2②よりも心理ゲーム1-2①の方が「たいへん満足である」もしくは「満足である」と答える人が多い。

心理ゲーム1-2の子どもの実験結果

心理ゲーム1-2①の方が心理ゲーム1-2②よりも「満足している」ということがわかる。

今回の実験では、大人と同じように子ども達も「他者の存在」を意識して決定しているといえる。

つまり、この年代の子ども達はすでに大人と同じような考え方ができるようになってきているということがいえる。

応用分析3-2

心理ゲーム 2-1の大人の実験結果：相手が500円を提供した場合 → 自分の500円を提供した割合 75%

心理ゲーム 2-1の子どもの実験結果：相手が500円を提供した場合 → 自分の500円を提供した割合70%

相手が500円を提供しなかった場合 → 自分の500円を提供した割合 21%

応用分析3-3 (この山岸実験は米国・韓国・日本の3カ国で行われた)

米国・韓国の大人：相手が500円を提供しなかった場合 → 自分の500円を提供した割合 0%

日本の大人：相手が500円を提供しなかった場合 → 自分の500円を提供した割合 10%程度

日本の子ども：相手が500円を提供しなかった場合 → 自分の500円を提供した割合 21%

(1) 心理ゲーム2-1で相手がくれるクラスで、自分も相手にあげると答えた人が多く、さらに心理ゲーム2-1で相手がくれないクラスの人、自分も相手にあげないと答えた人が多かった。つまり、子ども達も大人と同じように相手がくれる場合は自分も相手にあげて、相手がくれない場合は自分も相手にあげないと考える人が多いということである。

応用分析3のまとめ

小学校5・6年生になると大人と同じように他者の行動や言動が、意思決定に影響を与えていることがわかる。つまり、他者の存在が子ども達の意思決定に影響を与えているということがいえる。

4. 考察

今回の研究を大人と子どもの考え方の共通点と相違点から考えていく。共通点として、まず(山岸 1998)の結果から、大人は「他者の存在」を意識して意思決定しているということが明らかになっている。本研究の結果から子どもも「他者の存在」を意識して意思決定している傾向が強いことを明らかにすることができた。本研究の目的であった「子どもの意思決定に他者の存在はいかに関わるか」ということを実験的に明らかにすることができた。

次に相違点として主に以下の3つをあげる。1つは大人の大半が「他者の存在を意識する」というと、相手に対しての建て前や相手の出方、自分と他者の損得関係といったものを考えるだろう。しかし、この時期の子どもの中には「他者の存在」を意識しているが、大人とは異なった視点から「他者の存在」というものを意識していることも分かった。大人が考えている建て前や相手の出方、自分と他者の損得関係といった「他者の存在」を意識したものは異なり、本当に「相手のことだけ」を考えて意思決定したと考えられる。この「相手のことだけ」を考えて意思決定するということは大人にはなかなか難しいことでは「子ども」らしい考え方であると考えられる。

2つ目として、大人は明らかに「他者の存在」を意識して意思決定している人が多いといえる。この時期の子どもの中にも「他者の存在」を意識して意思決定している子どももいる。しかし、大人に比べて「自分だけ」のことを意識して意思決定している子どもも多いといえる。つまり、この時期の子どもが「大人に近い考え方で意思決定している」とも「子どもの考え方で意思決定している」とも断言しにくい。この時期の子どもは「子ども」の考え方から「大人」の考え方へと移り変わっていくちょうど「分岐点」にあたるため、子どもによって意思決定の結果がばらばらとなった可能性がある。この時期の子どもは「大人」の考え方へ変っていく、考え方の分かれる「分岐点」にあるということが考えられる。

3つ目としてこの時期の子どもには、「相手と同じでありたい・相手と平等でありたい」という傾向強い。こ

のことも「心理ゲーム2-2」の結果からわかるように、「心理ゲーム2-1」で「あげる」「あげない」をそれぞれ選択した理由を子ども達に尋ねたとき、「相手と平等になるから」という項目を選択した子どもが多く、この時期の子どもは「他者と同じでありたい・平等でありたい」という傾向にあることを本研究で検証することができたということになる。

5. おわりに

本研究の実験結果を踏まえて含意について考えてみると、われわれが考えていたよりも小学校5・6年生の子どもたちは本研究の文脈でいえば、「大人」に近い考え方ができるようになってきていると考えられる。われわれは、「子ども」の考え方について「大人」はもっと積極的に知っておく必要があると考える。現在、「少年犯罪」が増加する傾向にあり、低年齢化しつつもある。原因の1つとして、「大人」が「子ども」の考えていることを把握しにくく理解できかねている状態にあるからと考えられる。言い換えれば、現在では「大人」と「子ども」の心の距離がどんどんと離れてきているといえる。現代のなかで「大人」たちに求められていることは、「子どもたち」の考え方をしっかりと把握し理解して、適切な対応ができるようになることではないだろうか。子どもと子どもの明るい未来を守るためにも、「子どもの考え」ということについて「大人」が真剣に考えるべきではないかと考える。本研究がこのような研究の一助になれば幸いである。

参考文献

山岸俊男. 2000. 社会的ジレンマ ～「環境破壊」から「いじめ」まで～. PHP研究所